

本能寺の変について

—思想史としての日本と織田信長—



小原裕之

本能寺の変について
—思想史としての日本と織田信長—

目次

一、 導入～本能寺の変概説	四
二、 本能寺の変の主因について～朝廷共謀説	六
三、 三郎信長の改革について	八
(一) 軍事革命	八
(二) 経済改革	九
(三) 内政	一〇
(四) 外交政策	一二
四、 思想史的立場に立つた「本能寺の変」論	一四
五、 最後に	一七
主要参考資料	一八

一、導入～本能寺の変概説

あの戦国末期の衝撃的な事変を、単なる弑逆とする人は、もはや歴史に対して眼を開か
れていないと言う他あるまい。あの事変は、三郎上総介織田信長が臣下、惟任日向守十兵
衛明智光秀が、主君を討ったという弑逆以上の重大な意味があったということは、もはや
明白であると思う。

まず、本能寺の変の真の意味を探る前に、本能寺の変の前後の経過と、その直接的な要
因について述べようと思う。

本能寺の変が起こったのは、天正十年（1582年）のことである。このころ、三郎信長は
中国地方をその支配下に置く毛利氏一族と戦っており、その方面に筑前守羽柴秀吉を向か



織田信長像（長興寺蔵）

わせ、中国平定に当たらせていた。一方で
は老臣、柴田権六勝家は北陸方面に出陣し、
徳川家康の主力は関東にあった。そのよう
な中で、羽柴筑前守から、援軍の要請があ
った。三郎信長は、この援軍として、畿内
を統括する立場にあり、近江坂本と丹波を
所領とする惟任日向守を立て、同時に自ら
も中国地方に出陣することとしたのであ
る。

十兵衛明智は、近江坂本にあった自らの
所領に赴き、中国遠征のために一万三千の
兵を集めた。一方三郎信長自身は、嫡子織
田信忠と、近臣数百をつれて都に入ってい
た。十兵衛明智は、五月二十六日に近江坂
本を経つと、その日のうちに丹波亀山（現
在の亀岡）の居城に入り、翌二十七日に嫡

子光慶とともに霊峰愛宕山に登った。ここで十兵衛明智は数度か畿を引いている。さらに
勝軍地蔵にも参った。

翌二十八日、愛宕威徳院に於ける百韻連歌に参加している、有名な「愛宕百韻」である。
このときに十兵衛光秀が詠んだ癸句は非常によく知られている。

ときは今 天が下しる 五月かな

この癸句には、隠された意味があると昔から言われている。その一般的な解釈はこうで
ある。つまり、「ときは今」の「とき」とは「土岐」源氏の土岐であり、「天が下しる」の
「しる」は「落る」と書き、これで「天が下落る」となる。古くは、これは「土岐氏（つ

まり十兵衛光秀)が天下を治める」と解釈されていたのであるが、普通「治る」は天子が天下を治めるという時のみに用いる言葉であり、日向守が、自らが天下を治めるのに「治る」を使ったとは考えにくい。よって、これはやはり天子の治世を指していると考えべきで、次項で詳しく述べる光秀謀反の動機についての「朝廷との共謀説」の一つの根拠となっている。

十兵衛光秀はその配下の将兵一万三千を率いて六月一日に丹波亀山を經ち、申の刻(午後四時ごろ)に、都のある山城国と中国に通ずる街道との境にある老ノ坂に至った。ここで、十兵衛明智は、「わが敵は、本能寺にあり」との下知を下し、沓掛で将兵に腰兵糧、つまり腹ごしらえをさせた後、都に至った。三郎信長は自ら近臣数十とともに本能寺に宿泊し、嫡子信忠はその他の近習数百とともに、二条御所に宿泊していた。

六月二日未明、十兵衛日向守は手勢一万三千を率い、本能寺を囲むと火縄と弓で盛んに攻撃を仕掛け、敷地内に侵入した。三郎信長は、ちょうど朝起きたばかりで、顔を洗っているところを、やけに表が騒がしいので日ごろから重用している小姓の森蘭丸もりらんまるを呼び、「これは謀叛か。如何なる者の企てぞ。」と問うたところ、蘭丸が「明智が者と見え申し候。」と答えると、「是非に及ばず。」と叫んで槍をとったという(この場面の描写は、太田牛一おおたごういちの「信長公記」による)。

信長方も必死に抵抗したが、数十対一万三千では勝敗は目に見えており、結局のところ、三郎信長は手傷を負い、本能寺の奥にこもって、そこで自害し、配下の者もことごとく討ち死にした。

三郎信長の時世は伝えられていないが、死に臨んで、普段から好んで詠じていた謡曲「敦盛」の一節、

人間五十年
下天の内をくらぶれば
夢幻のごとくなり
ひとたび生をえて
滅せぬ者 あるべきか

を謡って果てたという。享年は四十九歳(満年齢四十七歳)であった。

十兵衛光秀はそのまま二条御所にも通り、信忠以下の手勢もよく戦ったが、多勢に無勢のことで壊滅し、信忠自身も自害する。織田信忠は享年弱冠の二十六歳であった。

これが、世に言う本能寺の変のあらましである。

二、本能寺の変の主因について～朝廷共謀説

この事変が、日向の一存で起こったことなのかどうか、また、日向は何故主君三郎信長に謀反したのか、長年議論がなされてきた。有名な仮説としては、三郎信長に非道な仕打ちをうけ、また、母親を見殺しにされたことに対する恨みが謀反の動機とする「怨恨説」、日向自身も天下に号令せんとする野望を抱いていたという「野望説」、あるいは、何者かに裏で操られていたという「黒幕説」などがある。また、この「黒幕説」にしても、黒幕として取りざたされている人物は種々多様である。例えば、時の天皇正親町帝、あるいは信長によって追放された、室町幕府最後の将軍である足利義昭、その他にも徳川家康や羽柴筑前守の名前まで取りざたされている。

しかし、最近の研究では、これらの説はいずれも退けられ、日向の背後で三郎信長を快く思わぬ公家がこれに関与していたという説が専ら有力である。

当時、朝廷にあって武家伝奏の役についていた勸修寺晴豊が、その日記である「日々記—天正十年夏記」のなかで、「信長打談合」の存在をはっきりと記している。この談合には、日向自身のほかに、もちろん勸修寺晴豊、前関白近衛前久、吉田兼見、誠仁親王も名を連ねていた。これには時の正親町帝も関わっていたという説もある。彼らが朝廷内において三郎信長の死を画策し、実行犯として朝廷にも近く、名門土岐源氏の出身でもある惟任日向守を選び、信長を死に至らしめたのである。日向自身も、信長に不信を抱き、又信長に左遷されたこともあって、進んでこの反逆に加担した。

「信長打談合」...この存在は、本能寺の変が単なる日向個人の弑逆ではなく、新勢力と旧勢力の争いの頂点で起こったことが見えてくる。これは、上総介織田信長という男の築いた政権が有していた、というよりも、三郎信長という人物が有していた、宿命的対立構造なのである。

旧勢力は、公卿の筆頭格である前関白近衛前久を中心とし、誠仁親王をはじめとする天皇家の姻戚者や公卿がこれに加わり、室町幕府の足利將軍家にも近い土岐源氏の出身である惟任日向守が加わることで特徴づけられる。新勢力は、その筆頭にして代表であり、それを体現するものである三郎信長が率いており、筑前守秀吉も、その部分的賛同者と見ることは不可能ではない。三郎信長が平氏の流れを継ぐものであることを考えれば、日本の武家社会の宿命ともいえる、源平の対立をも見ることができる。惟任日向守が非常に近い存在であった足利義昭を追放したのが三郎信長であることを考え合わせれば、日向守が織田上総介を討たんとしたのも十分に頷けよう。



明智光秀像（本徳寺蔵）

しかし、三郎信長の死を画策した者の中心が公卿であったことは、少し問題とせねばならぬ。なぜ、公家勢力が、それも朝廷の中心的な位置にいる公家が三郎信長という、武家の筆頭者と対立せねばならなかったのであろうか。源頼朝による鎌倉開府以来、否、そのさらに以前の相国寺入道平清盛がその実権を握って以来、わずかな例外（建武の新政）を除き、朝廷と公家たちが天下の実権を失って久しい。であるから、三郎信長から天下の実権を奪い還そうとした、とは考えにくいのである。しからば、なぜか。

「天下布武」という言葉は、三郎信長が、己が印に使った言葉である。従来、この言葉の語義は、「武力をもって天下を平定する」と考えられてきた。しかし、三郎信長の内政、行動、思想を見れば、単なる天下の武力平定を意味していたとは考えにくい。むしろ、「天下布武」とは、「武家が天下（朝廷、公家、寺社、町人、農民、その他の庶民）を制する」と解すべきではないであろうか。



「天下布武」の印

三郎信長は、自らを「関白」「太政大臣」「征夷大將軍」のいずれかに任じよ、と迫ったり（特に「征夷大將軍」は、坂上田村麻呂以来、源氏の者がその任に就くのが慣例であったにもかかわらず、である。三職推任事件）、朝廷がそれを定めることを常としていた、いわば朝廷の権威である「曆」を、尾張で用いられていた地方曆を使え、と迫ったり（作曆権問題）、あるいは御所のうちで馬揃えを行い、総勢三万とも五万とも言われる織田勢の威容を朝廷に見せつけるなど（禁裏馬揃え）、朝廷に対する圧力を緩めず、朝廷の権威を蔑ろにする行動をとっている。

また、武田攻めの折には、前関白近衛前久に対して馬上から暴言を吐いたともいう。この武田攻めについては、天目山で武田四郎勝頼の一族を滅ぼしたのち、この武田の残党を匿っていた恵林寺に対し、残党の引き渡しを拒んだとして焼き打ちを仕掛けた。山門の上に逃げ上がった僧侶は、結局一人残らず焼き殺された。この中には、朝廷から国師号を受けた高僧の快川紹喜もおり、「心頭滅却すれば火も自ずから涼し」という有名な言葉を残して炎の中に消えた。

一連の朝廷を愚弄した行動の仕上げとして、三郎信長は時の天子正親町帝に讓位を迫る。正親町帝は勿論これを拒絶し、信長と朝廷の亀裂がさらに深まりつつあったときに起こったのが本能寺の変だったのである。

三郎信長のこうした行動から、朝廷に近い公家たちは、朝廷の存続そのものに強い危機感を抱いた。三郎信長は自分の居城である安土城の一角にある惣見寺に自らを神として奉っており、三郎信長は天子の権威を全く認めず、自らが日本国王として君臨することを望んでいたのであろう。この様な三郎信長の存在に朝廷に近い公家たちや、日向守が危機感を覚えたのは当然であろう。

ここまでの本能寺の変の経緯及び背景は、これまで様々な研究者によって研究された内容である。しかし、私はこの事変には更に深い、思想的意味を見出すことができると思う。

三、三郎信長の改革について

本能寺の変の思想的意味を探る前に、我々は三郎信長が如何なる思想を持ち、我が国に於いて如何なる変革をもたらそうとしていたかを考えねばならぬ。何故なら、三郎信長が京都本能寺にて討たれた本能寺の変という事変の思想的意味は、その主人公である三郎信長の思想を云々せねば、見出すことができないからである。



羽柴秀吉像（高台寺蔵）

三郎信長の変革は、いくつもの面から見ることができる。大別するならば、それは「軍事」「経済」「内政」「外交」ということになろう。

（一）軍事革命

よく三郎上総介は「中世を殺した男」と形容される。その最大の理由は、軍事革命にある。上総介の軍事革命とは、一体如何なるものであったのか。

まず、第一に挙げられるのは「兵農分離」である。この事業は三郎信長の時代には完成せず、信長の後に天下に号令した太閤豊臣秀吉による「刀狩り」、そしてその後、征夷大將軍となって江戸幕府を開くこととなる内大臣徳川家康による「士・農・工・商」という身分制によって完成された。この「兵農分離」こそ、中世と近世の日本の軍陣を大きく隔てる特徴なのである。

中世の軍勢の主力は、土佐にその覇を唱えた長宗我部氏に代表されるような、いわゆる「一領具足」である。この一領具足とは、一領の具足を田畑に持って出る農民のことであり、主君より下知があれば、その具足を田畑から着て戦場に駆けつける、いわば農民でありながら武士であるようなものを指した。つまり、一領具足の本業は農民であり、戦場に出るのは副業のようなものであったのである（随分高い代償を要する副業なのであるが）。

しかし、現在の最新の研究によれば、三郎信長の「兵農分離」は、羽柴筑前守が後に行ったものに比べれば、まだまだ徹底したものとは言い難い。武人と農民の境は、三郎信長存命の時代には、まだまだはっきりしていなかったのである。

その他にも、彼の軍事改革はいろいろと挙げられる。「兵站」というものを重視したのも信長が最初であろうし（もっとも、兵站の重要性については、筑前の方がよく理解していたであろうが）、信長の統括する巨大な軍事機構、すなわち方面軍（柴田権六勝家の統括する「北陸方面軍」、惟任日向守の率いる「近畿管領軍」、筑前守秀吉率いる「中国方面軍」、澁川一益の「関東管領軍」、神戸信孝の下にある「四国方面軍」）の存在を把握するための参謀制度（これも、筑前守のもとでさらなる発展を見て、完成の域に達した）を充実させ

たことも挙げられよう。

世界史的な観点から言えば、石山本願寺の顕如との戦いに於いて、石山本願寺に兵糧を届けんとする毛利勢の村上水軍を打ち破るため、志摩の九鬼水軍に命じ、世界初の鉄甲船を作らせたことが特筆されよう。村上水軍の火攻めに手を焼いた三郎信長は、九鬼水軍の将であった九鬼嘉隆に燃えぬ船を作れと命じ、その結果として、船体全部を鉄板で覆った安宅船六隻が完成した。これは、いずれも鉄板の重量に耐えられるよう、普通の安宅船よりも大型に作られ、同時に単に鉄板で船体を覆ったのにとどまらず、三門の大筒（つまり大砲）を搭載していた。この大筒によって、村上水軍の舟は、鉄甲船に群がったところを狙い撃ちにされ、ことごとく撃沈されたのである（第二次本津川口海戦）。これによって石山合戦は急展開を見せ、信長は本願寺を制圧することに成功したのである。この鉄板による



長篠合戦図屏風（徳川美術館蔵）部分

る装甲を施した船は、当時ヨーロッパにもまだなく、世界初の試みであった。

もう一つは火縄である。三郎信長の軍が装備していた火縄の数は、当時としては日本一であった。勿論、時代が下り、大坂の陣ごろになると、その数はさらに大きくなったのであるが、それでも、最高で一割にも及ぶ火縄の装備率は群を抜いている。特に、長篠城をめぐる攻防で、武田四郎勝頼勢一万二千を、設楽ヶ原に打ち破った時は、織田・徳川連合軍

三万四千のうち、一〇〇〇挺とも三〇〇〇挺とも言われる火縄を使用し（これらの火縄は、主に堺と国友で製造されたものである）、これを打ち破った（いわゆる長篠の戦いであるが、この戦いは決してこの火縄による設楽ヶ原での戦鬪に決着があったのではない。それ以前に、長篠城を包囲していた武田勢を、徳川家の臣、酒井忠次率いる別働隊四千を用いて礮ノ梁山砦に撃滅した時点で勝負はあったのである）。

この多数の鉄砲の装備を可能にしたのが、三郎信長の圧倒的な経済力である。

（二）経済改革

三郎信長の取った経済政策の中で、もっとも有名なものは「樂市樂座令」であろう。三郎信長がこの令を発するまで、高人はある市で高いをするためには「座」という一種の組合に加入し、それに対して税を納めなければならなかった。上総介は、この「座」というものを撤廃し、高人たちを自由に高いをできるようにしたのである。この政策によって、

経済は活性化した。

また、三郎信長は自らの領する国々で関所を全廃した。これにより、さらに流通が活発になり、人と物の行きかいが盛んになり、更なる経済活性化をもたらしたのである。

この関所の全廃には、他にも狙いがあった。それは情報の流通である。この当時、諸国の最新の最も正確な情報を掴んでいたのは商人たちであった。京や堺、安土に出入りする商人たちから、遠隔地の情勢をいち早く掴むことも、この政策の狙いであったのである（もともと、情報の重要性は羽柴筑前守の方がよく理解していたであろう。平和の時より縦横に情報網を張り巡らし、中国の最前線にあっても畿内の情勢を把握していた。この情報網のゆえに、本能寺に主君信長が横死した時、いち早く兵を引き、織田家の宿老権六勝家や、盟友であった徳川家康よりも早く謀反人たる日向守を打ち果たすことに成功したのである。彼の「中国大返し」の成功も、彼の情報網の故であったのである。結局のところ、いつの時代も戦争とは情報によって決するものである。これは戦国時代であろうと現代であろうと同じである。旧大日本帝国は、太平洋戦争で米国に敗北したが、それは明らかに情報のなにかについて、米国の半分にも満たぬ認識しか有していなかった故であろうと思う）。

三郎信長の直轄領も、このような経済政策と連動している。彼が直轄地としたのは、東海道の要衝であり、畿内への入り口である美濃、尾張、そして、琵琶湖を中心とする畿内の水上交通の要衝である近江の安土、天下の政治的、経済的、文化的中心地であった京都、南蛮貿易と流通の中心地であった堺などである。いずれも、選ばれているのは経済の中心地と交通の要衝であり、如何に三郎信長が経済と交通を重視していたかがこれからもよく分かる。

このうち、三郎信長にとって堺の直轄領は極めて重要であった。というのも、堺は硝石貿易の中心地であり、火縄を使うための大量の火薬に使用する硝石を一手に引き受けていたのが堺だったからである。日本には硝石を産出するところはほとんどなく、九割以上をインドや唐の国からの輸入に頼っていたのである。設楽ヶ原に於ける三〇〇〇挺の鉄炮の使用の陰には、三郎信長の並はずれた経済力と、経済政策があったのである。

(三) 内政

内政に於ける三郎信長の政策は、先述した軍事および経済に於ける革命的政策と一体であるため、ここで新たに述べることはあまり多いとは言えない。しかし、いくつかの点を挙げる事が出来る。また、ここでは三郎信長の文化に寄与した改革も述べようと思う。

内政に於いては、後の本論考の主要部である三郎信長の政治・国家思想と密接に関わってくる事が出来る。それは、何よりも室町幕府と朝廷の権威の、徹底した軽視である。

確かに、室町幕府の権威を軽視したのは、決して三郎信長が特別であったわけでもなからう。すでに、この時期に入っては、室町幕府は実際的な権力を何ら有しておらず、幕府の権威に従おうとする戦国武将は皆無であったといってもよい。甲斐の名将武田信玄も、

その生涯の最後に上洛を果たそうと図ったが、これも表面的には叡山を焼き打ちにした仏敵である織田上総介を、時の公方足利義昭の命を受けて打ち果たすため、としているが、信玄に足利幕府を再興する意志があったとは考えにくい。信玄も、足利家の権威を利用して、天下に号令しようとしていたのであろう。

しかし、三郎信長と武田信玄の大いなる相違は、三郎信長の全く將軍家に対する礼節を欠いた態度である。三郎信長は、自ら文書によって、公方の癸する下知は、すべて信長の許可が必要である、と通告し、それが守られていなければ、更なる通告を行うなど、足利義昭に面と向かって、汝は傀儡である、と宣言するような行動を繰り返している。三郎信長が、足利將軍家の権威を、端から全く重視していなかったことがよく分かる。このことは、後に述べる三郎信長の思想と極めて密接にかかわってくる事柄である。三郎信長は、旧来から続いていた権威、というものを全く認めようとしなかったのである。



足利義昭木像（等持院蔵）

叡山の延暦寺を焼き討ちにしたのもその為である。三郎信長は、延暦寺の僧侶を、遠いイスパニアやポルトガルからやってきたルイス・フロイスやオルガンティノをはじめとするイエズス会の宣教師たちに比して、極めて墮落した者どもである、と考えていた。実際、当時の延暦寺の僧侶の中には、酒を飲み、女犯を犯す者もいた。三郎信長は、そのような僧侶に比べて、自らの命の危険も顧みず、極東の地にまで自ら信ずる教を伝えにきた宣教師たちの勇気を高く評価していたのである。故に、出家の身分を忘れ、酒色におばれる僧侶たちを許せなかったのであろう。しかし、今日の感覚からしても、そして、当時からすればなおさら、天台宗開祖の最澄が開山し、平安京遷都から千年以上の歴史を誇る比叡山延暦寺の焼き打ちが暴挙であり、惟任日向守をはじめとして家中にも多くの反対者がいたが、それを退けての焼き打ちであった。この結果として、武田信玄の上洛作戦を招くこととなる。先述したように、信玄は、足利將軍家を愚弄し、千年の歴史を持つ延暦寺を焼き討ちにし、多くの僧侶を殺戮した仏敵信長を打ち果たすことを大義名分として上洛の途に就いたのである。

信長の朝廷に対する数々の蔑視政策は、先ほどの項で述べたので、ここでは繰り返さないが、かくも三郎信長の旧来の権威に対する考えは急進かつ厳格なものであったのであった。

だが、三郎信長が我が国の文化、特に築城技術に寄与したものは極めて大きい。三郎信長は、若いころより、築城に関しては、当時としては極めて特異な考えの持ち主であった。

三郎織田信長の、当時としては極めて特異な築城は、まず、美濃の岐阜城（かつて斎藤道三、義竜、竜興三代の居城であった稲葉山城）に現れる。三郎信長は、この城を斎藤竜興を退けて自らのものとしたのち、大規模な改築を行った。この岐阜城に、三郎信長は初めて「天守」を築く。それまでの山城に備えられていた「櫓」よりもはるかに規模の大きい、二層か三層の建築物であり、それはその城のシンボルであり、権勢の象徴でもある。ここに、中世とは異なる近世城郭の最大の特徴である「天守」の存在が出現する。この「天守」はその後も発展し、いわゆる戦国三英傑（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）の築いた

三つの城（安土城、大坂城、江戸城）の「天守」でその建築物としての頂点を極める。

しかし、三郎信長の築いた「天守」は、他の城の天守とは意味が異なってくる。特にそれが顕著なのが、彼の築いた城の最高傑作であり、日本建築史上まれに見る名建築物であった安土城の「天主」である。この安土城の「天主」には、「天守」の文字は使用しない（使用例もあるが、本来はこれは誤りである）。

通常城（江戸城や大坂城でもそうであるし、現存している姫路城や松本城、犬山城でもそうであるが）の天守は、本来居住空間ではない。非常のときにそこに籠城するための備えはしてあったが、普段から城主やその家族がそこで暮らしていたわけでもないし、家臣がそこに伺候することもなかった。普段、城主とその家族は天守のある曲輪の「本丸」に住んでいた。飽くまで天守は城の象徴であり、領国を眺め渡す權的な性格を多分に有していたのである。

しかし、安土城の「天主」はそれとは全く異なっている。安土の天主は、城主である信長の居住施設だったのである。一階には畳を敷き詰めた書院や局、信長の寢所などがあり、信長はそこで寝起きし、家臣の伺候も、使者との謁見もそこで行った。上の階も単なる櫓のようなものではなく、いくつかの階には畳が敷かれ、当時一級の絵師であった狩野永徳による襖絵が並んでいた。また、五階は八角堂のような形状をしており、外面には鯨と龍（いずれも中国では皇帝の象徴とされている動物である）が描かれていた。最上階は高欄を持つ方形になっており、室内には狩野永徳の手になる「三皇五帝」「孔門十哲」「高山四皓」「七賢」の絵が描かれていた。

天主に城主の居住空間が置かれた例は、後にも先にも安土城だけではなからうか。我が国の建築史を見るにあたり、貴人の屋敷、邸宅の中では、大体外から見た限りではその屋の主が、その邸宅の敷地の中の、どの建物に住んでいるかは、わからない。これは、信長の後の城郭でも同様である。しかし、三郎信長の築いた安土城では、主である信長自身がどこに住んでいるかが、どこから見ても分かる。その点から考えても「天主」は極めて斬新な建築物であったのである。

（四）外交政策

外交面での信長の政策は、極めて進歩的であった。「鎖国」というようなことを、三郎信長は考えたこともなかったであろう。先進的な西洋の技術を積極的に取り入れ、いわゆる「南蛮貿易」を奨励した。その中心地であった堺に対して、三郎信長が並々ならぬ注意を払っていたのは先述したとおりである。

三郎信長の外交政策の中で、特筆すべきはキリシタン、つまりカトリック教徒に対する政策である。彼は先述したとおり、海を越えて布教にきたキリスト教徒の勇気を高く評価し、自身その教えに帰依することこそなかったが、キリスト教に理解を示し、その布教活動を支援した。織田家家中には、高山右近（洗礼名「ユスト」）をはじめとして、多くのキ

リシタン大名もいた。十兵衛光秀の娘で、細川藤孝の息子忠興の室となった玉も、「ガラシヤ」という洗礼名を持つキリシタンであった（「玉」よりもむしろ「ガラシヤ夫人」として有名である）。また、安土城下にはカトリックの神学校である「セナリヨ」もあり、三郎信長のもとでカトリックは順調な布教活動を行えたのである。このセナリヨでは神学のほかに、音楽も教えられており、当時の中世の音楽がそこで奏でられ、三郎信長もセナリヨに立ち寄った際にはそれに熱心に耳を傾けていたという。

三郎信長は、同時に有名な「日本史」の著者でもある宣教師ルイス・フロイスや、ヴァリニャーノ、オルガンティノらとも親交を持ち、西洋文化に対する理解を深めた。フロイスが三郎信長に謁見した折、フロイスの「地球は丸い」という言葉に対して、三郎信長が即座に「理に叶う」と答えたという話は有名である。この逸話が実話であるかどうかは別としても、三郎信長が、当時の日本人としては極めて進歩的かつ合理的で論理的な頭脳の持ち主であったのは確かである。作家の辻邦生は、その作品である「安土往還記」に於いて、三郎信長をどこまでも「理」を追求し、「理」の前には己をも捨て去る人物、と位置付けている。

ここからは、私の憶測も含まれるのであるが、恐らく三郎信長は、諸外国、南蛮との貿易もさらに促進し、西政列強に並ぶような国家を構築しようと考えていたのではあるまいか。彼が浅井・朝倉攻めや、長島一向一揆を討伐した時の徹底した殲滅と落ち武者狩りは、西政の絶対君主を想起させよう。三郎信長が如何なる国家を構築しようとしていたかは、この様なところからもうかがえよう。



高山右近像（カトリック高槻教会）

四、思想史的立場に立つた「本能寺の変」論

三郎信長は、この日本に、一体如何なる国家を樹立しようとしていたのであろうか。

これまでに考察してきたことを考え合わせれば、それが最早我が国に今まで存在した如何なる政治形態、如何なる政権とも異なつた、極めて独特の、我が国の歴史からは連想しがたい政権構想であつたことは容易に考えられよう。では、この三郎信長の政権構想とは、一体如何なるものか。

それは、先ほども触れたのであるが、まさに絶対主義的な帝国であつたのではあるまいか。「天下布武」の言葉が示すように、寺社勢力、朝廷・公家勢力、領民の上に武家と、その長たる三郎信長自身が君臨する国家である。しかし、この信長の政権構想を、西政にあつた、たとえばルイ十四世時代のブルボン王朝であるとか、フリードリヒ大王統治下のプロシア帝国のような絶対主義帝国と同じように考えてはなるまい。西政列強の絶対主義、帝国主義は、封建主義の延長線上に現れた国家形態である。そのような帝国は、むしろ後の徳川内大臣によって開かれた徳川幕府に見るべきである。

織田政権では、むしろ信長個人が、個人の思想と権力が前面に打ち出されていたように思う。三郎信長の政権のもとでは、信長自身こそが神であつた。これは、三郎信長の居城であつた安土城内に建立された惣見寺に安置された「^{ほんざん}金山」という石の存在で証明される。三郎信長は、「金山」こそが自らの化身であり、神体であるとしており、まさにここにあつて三郎信長は神となつたのである。羽柴筑前守も後に豊國大明神として、徳川内府も東照^{とうしやう}大権現として神となつたが、この二人はその死後に神として祀られたのに対し、三郎信長は、その存命のうちに自ら神を名乗つたのである。

このような彼の考えや行動は、彼の同時代人には全く理解されなかつたに相違あるまい。筑前守も信長の一番の理解者であるときれているが、その実、三郎信長のこうした思想は到底理解できなかつたであらう。

ここからさらに話を限定し、三郎信長の思想そのものについて論じようと思う。

三郎信長が朝廷をはじめとする旧来の勢力を歯牙にもかけていなかったことは、これまで述べたとおりである。この裏には極めて厳格な合理主義精神が潜んでいると思う。彼が旧来の勢力を軽視していたのは、理に叶わぬ不合理な存在、古色蒼然とし、形骸化してその意味を失っているものは最早存続するに値せぬ、と考へていたからであらうと思われる。彼は、堺屋太一の指摘するように、戦国時代に於いて「天皇機関説」に相当するような考へを持っていたのであろう。すなわち、帝も特別な権威を有した神聖な存在なのではなく、この国の一つの機関、特定の役割をもつた個人のすぎぬ、という考へである。そして、その位置は明らかに三郎信長よりは低かつたのである。しかし、天子の有していた宗教的な権威は、三郎信長といへども武力によって奪い去る、というわけにはゆかなかつた。それ故に三郎信長は「金山」を神体とすることによって、自ら神となり、その宗教的な権威をもわが手中に収めようとしたのである。

ここからは少し憶測になるのであるが、私はこのような信長の政治思想を鑑みるに、彼の心情に思いを馳せずにはいらぬ。恐らく、彼は誰からも、同時代に生きた日本人の誰からも理解されなかったのであろう。理解者を強いて挙げるならば当時日本にやってきていたイエズス会宣教師たちであろうか。彼らが恐らく信長の心の内を、最も理解していたのかもしれない。

このような思想は、最早その当時の、それ以前の日本人が全く考えもしなかった思想である。多くの点に於いて百年から数百年、歴史に先んじた考え方であり、そのいくつかは、現代に至ってもまだ実現されてはいない。

この三郎信長が目指した政権構想、政治思想は、我が国のこれまでの思想の流れからして、極めて異常であり、非常に突出した異様さを持っている。この当時の日本人には（現代でも）、叡山の宗教的権威を全く歯牙に掛けず、これを焼き討ちし、数千の僧侶とその他の老若男女を虐殺するようなことは、思いつかないというよりも、彼らの意識の外にあってであろうし、天子と朝廷の権威を全く認めず、自らは天子よりも高位の者である、と宣言するなど、まったく想像もできなかつたであろう。

ここで留意すべきは、この信長の思想は、現代に於ける我々の目からしても、かなり特異なものに映る点である。現代の我々にも、政治的な権力を有していないとはいえ、天皇よりも自らが高位である、と言えるような人物はまずいないであろうし、天皇が不要である、と言うのも憚られるであろう（このような考えを持っている人もいるし、それは別に悪いことではない）。こう考えると、信長の政権構想は、現代にあっても受け入れがたいものなのである。

「麒麟児」という言葉があるが、三郎信長はまさにその麒麟児である。彼のような人物は、日本史上二人としておらぬ。彼ほど進歩的な、あるいは西洋的な頭脳の持ち主、理論的で論理的な思考の持ち主、深い洞察力と巨大な視野の持ち主、徹底した理論家は見当たらぬ。このことは、逆に我が国で信長の思想（人物像ではない）が如何に受け入れられにくいかを示していよう。三郎信長は、朝廷を中心とする旧勢力に殺されたのではない。我が国の思想の流れから拒否されたのである。

我が国の思想史は、三郎信長の思想を拒絶した。私はそう考えている。朝廷の公家たちは、自分たちが安住してきた権威、これまでの日本人が敬ってきた権威、精神的権威が奪われることを恐れて、三郎信長の死を画策した。彼らは歴史の流れを変えようと考えたのかもしれない（具体的にそういう意識があったかどうかは別として）。三郎信長のもたらした思想の流れを押しとどめ、断ち切ろうと考えたのかもしれない。彼らは、自らの意志の力によって、これを行おうと考えたのかもしれない。

しかし、三郎信長の死は、私は必然的なものであったと思う。本能寺の変が、たとえ起こらなかつたとしても、三郎信長と彼の思想は、いずれ死を迎えたと思う。三郎信長は、日本の思想史から拒絶された麒麟児として、本能寺の変の発生如何にかかわらず、いずれ葬られる運命にあったのである。たとえ、三郎信長がその天寿を全うしたとしても、彼の

死後、その思想を受け継ぐものは一人も現れなかったのではあるまいか。三郎信長が嫡子信忠も優れた武将であり、軍略家としても優れた人物であったようだが、思想家、政治家としての手腕は如何であったろうか。三郎信長の築いた国家構想を受け継ぐほどの器があったか、甚だ疑問である。筑前守秀吉や、徳川内府にも、信長の思想を受け継ぐような器量は備えていなかった。二人とも優れた軍略家であり、優れた政治家であり、勇猛な武将であったが、そして、徳川内府は徳川幕府二百六十四年の繁栄の基を築くだけの器量をもった人物ではあったが、三郎信長ほどの異文化に対する鋭い理解力、そして論理性は備えていなかったと思う。太閤豊臣秀吉が思想家、政治家として、三郎信長には及びもつかぬのは、文禄・慶長の役という愚行を見ればよく分かる。

こう考えると、本能寺の変の位置づけも自ずと変わろう。この事変は、冒頭に述べたように単なる弑逆などではなく、また、旧勢力、反信長勢力による暗殺でもなく（歴史学的にはともかく）、三郎信長という麒麟児の、極めて特異な思想に対する、日本全体の拒絶反応の表出だったのである。それがたまたま、公家勢力と日向守光秀という形をとって現われたにすぎない。

五、最後に

本能寺の変を概観して思うのは、「天才ゆえの悲哀」である。三郎信長は天才であるがゆえに、まったく理解されなかった。今日に於いてさえ、彼の思想は完全には理解されていないというのに、当時、彼の思想を理解する者がいたであろうか。ましてや、彼の心情を理解する者がいたであろうか。

天才、というものは、いつの時代も、また如何なる分野でも孤独なものである。音楽や、芸術の世界に於ける数多の天才たちもみな孤独であった。三郎信長も、自身の言う絵画や匠の「名人上手」のように、軍略と政治の名人上手であったのであろう。そして、その天才のゆえに、孤独であったのであろうと思う。であるから、彼はキリシタンに帰依しはしなかったが、キリシタンの宣教師や、彼らの文化に、自らの魂の充足を求めたのかもしれない。彼がキリシタンのイエズス会師たちに見せた親愛の情は、このようなことで理解できるかもしれぬ。

三郎信長の成したことはあまりに大きく、それに比してその遺産はあまりに少ない。彼の成したことは、彼の人物そのものから発している。今日の我々は、彼の人物に、その果敢な判断力、明晰な頭脳、鋭い洞察力、総合的な視野、に驚き、目を向けるのであるが、彼がそれらの彼の能力のすべてを傾注して実現しようとした、彼のみの国家像にも、もっと目を向けるべきであると思う。そして、その思想が「理」という単純明快にして完全なるものに依っていたということに、目を向けるべきではないであろうか。

2008年1月30日

主要参考資料

歴史群像シリーズ⁵⁰「戦国合戦大全」上巻 下克上の奔流と群雄の戦い
学習研究社 1997年

歴史群像シリーズ⁵¹「戦国合戦大全」下巻 天下統一と三英傑の偉業
学習研究社 1997年

歴史群像シリーズ特別編集「【決定版】図説・戦国武将 118」
学習研究社 2001年

歴史群像●名城シリーズ^③ 安土城
学習研究社 1994年

歴史群像デラックス版^⑤ 名城の「天守」総覧
学習研究社 1994年

高山右近史話

H. チースリク Hubert Cieslik S. J. 著
聖母の騎士社 1995年

安土往還記

辻邦生 著

新潮社 昭和四十七年（1972年） ※初版は昭和四十三年筑摩書房より

本能寺の変について
—思想史としての日本と織田信長—

表紙：織田信長像（長興寺蔵）、明智光秀像（本徳寺蔵）、織田家家紋木瓜紋、明智家家紋桔梗紋
裏表紙：織田信長花押（「麟」の字とされている）

本能寺の変について
—思想史としての日本と織田信長—

